

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2018

「豊かに生きる～大学は知の宝庫～」

第3回 10/19（金）13:30～15:00 報告

まちライブラリーの時代

講師 アンドリュー・デュア（本学教授）於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

本学健康福祉学部管理栄養学科 兼 図書館長のアンドリュー・デュア先生による「まちライブラリーの時代」が開催されました。

まず、子どもの頃にどれだけ本に接するかが将来を左右する、というニュースウィークの記事が紹介されました。平均すると日本人は一人 102 冊の本を所有するのに対し、北と東ヨーロッパなどでは平均 200 冊以上を所有するそうです。本を家に持つのは良い事であるが、その眠っている本を生かすことが出来れば、より多くの人が本に接することが出来るのではないか、本講演ではこのことが主なテーマとして取り上げられました。

そもそも日本では古くから出版文化があり、文庫がそれを支えてきました。藩や幕府は文庫、庶民は貸本屋といった具合に、自らは本を所有しない形態が一般的でした。明治維新によって欧米の図書館がもたらされ、その当時から考えれば日本の図書館は大きく進歩しましたが、まだまだ数が足りないとのこと。全ての自治体が図書館を所有しているわけではなく、たとえ持っていたとしても利用者の家から遠いなど使い勝手が悪い場合も多い。特に、子どもにとってこれは深刻な事態と言えます。具体的には、日本は 39,128 人に対して一つの図書館があるのに対し、欧米は 8,000 から 10,000 人程度に一つの図書館だそうです。

それとは別に、日本において多いのが地域文庫であるとのことです。地域文庫とは一個人や団体が本を集めて公の場で提供することです。文庫活動は寺子屋が源泉と考えられます。石井桃子著「子どもの図書館」以来、多くの文庫が増えたそうです。読書が大切だと思うのなら、行政に頼らず、思い切って自分で文庫を開いてもよいのではないだろうか！先生は来場された参加者の皆さんに熱心にそう提案されました。

子どもの生活は範囲が制限されています。その中で本に接する機会を増やすには文庫を寄り道に置くといいのではないか。そこで読み聞かせや工作、おやつを食べるなど子どもにとって知的で楽しい場を創出することが出来る。これは難しいが、効果は大きい。実は欧米ではこのような文庫はほとんどないそうです。まさに文庫は日本特有の文化であり大切にすべきだ、カナダで司書を経験し、ヨーロッパの図書館事情にも精通するデュア先生の説得力のある言葉に、参加者は一様にうなづきました。

次に先生は、欧米の「リトルフリーライブラリー（巣箱図書館）」を紹介されました。これは自分の家の庭や玄関先に箱を設置して、その中に本を入れて自由に貸し出すものです。このライブラリーでは、他の人が本を足したりするなど循環もあるとのこと。こういった交流は街を明るく活気づけます。日本にも多少はあるそうですが、まだまだ知名度は低いのが現状です。本は人がいるところに届けられるのが理想です。文庫を開設する難しさは、場所や時間、宣伝、維持管理など。一方、一番の利点はなんといっても許可がいらないという気軽さです。

続いて、磯井純充氏が提唱する「まちライブラリー」を紹介されました。人が集う所に本を置いてはどうか。お互いに意見や感想を話し合う機会が生まれます。人が繋がることで本の魅力は増すのではないか。例えば本のしおりに感想を書いてもいい。このように本を所有物と考えるのではなく、他の人と感動や喜びをシェアするものと考えてもいい、と先生は力強くおっしゃられました。

すぐ出来る一箱文庫、1分読み切り文庫、自転車文庫、居酒屋文庫など様々な場所やテーマを考えても楽しい。人が集う所に誰でも簡単に本を手に取って読む事が出来る、これが「まちライブラリー」の楽しみです。今後も、何千冊も所蔵する大きなものから、一握りの小さなものやテーマに特化しているものなど様々な形態の図書館が増えてゆくと良いのではないでしょうか。

【講座の様子】

